

長崎大学の今を発信!

# Homecoming Day Press Vol.3

Welcome Home to Nagasaki University

Vol.3

ホーム  
カミングデー  
プレス Vol.3  
2012/11  
国立大学法人  
長崎大学  
NAGASAKI UNIVERSITY



## 核兵器廃絶 研究センター

世界共通の目標である「核なき世界」の実現に向け活動する核兵器廃絶研究センター。8月には、CTBTのトート事務局長を招いてシンポジウムを開催



今年九月から十月にかけて、長崎大学にいくつもの大型予算獲得の知らせが届いた。一つは、医歯薬学総合研究科の「熱帯病・新興感染症制御グローバルリーダー育成プログラム」が文部科学省の博士課程教育リーディングプログラムのオンリーワン型に採択されたこと。熱帯に蔓延する感染症や国際的に脅威となる新興感染症について幅広い知識や技術を持ち、グローバルに活躍するリーダーを育成するための博士課程教育を行う同プログラム運営のために、最大で年間三億円の予算が文

部科学省から拠出される。経済学部や国際健康開発研究科などの取り組みも文科省が、「グローバル人材育成推進事業」に採択。国立大学の中心で経済学部中心の取り組みとしては唯一採択された。このほかにも、大学間連携共同教育推進事業に長崎県内の大学が連携して取り組む「留学生との共修・協働による長崎発グローバル人材基盤形成事業」と「多職種協働による在宅がん医療・緩和ケアを担う専門人材育成拠点」の二件が採択されるなど、長崎大学への期待が高まっている。

# 地域そして世界へ 期待高まる 長崎大学の役割

二〇一二年。大学をめぐる変革のうねりがますます大きくなっている。こうしたなかで、教育・研究面で多くの予算を獲得するなど長崎大学をめぐる動きも活発化している。

## 龍踊部



地域の祭りの出演をメインに定期的に県内の幼稚園や小学校を訪れ、ボランティアで演技披露、指導も続けている。「見ている人が盛り上げてくれるので楽しい」と部長の内田正典さん(20)。頭から尻尾の動きだけで龍の感情を表現。初心者中心、男女混合18人のチームは「躍動感を意識して、練習に励んでいる」と話す。

## 放送研究会



毎週金曜日、1時間のラジオの生放送に出演。話題は学生生活やスポーツが中心。大学生の「ありのまま」を声に乗せている。年に3回、放送作品を制作。他大学と作品を持ち寄り、良い点や改善点を出し合う。提出期限の1カ月前には仕上げ、部内で入念に校正。「制作者の意図が伝わるように心がけている」と話す。

## 学園祭実行委員会



九州の各大学とのコラボ企画を練ってきた学園祭実行委員会。昨年のラムネ「祭だー(サイダー)」に引き続き、今年はシリコンのプレスレットを販売する。実行委メンバーは67人。インパクトあるイベント名や内容の考案など、役割分担をして進めてきた。委員長の中島優さん(21)は「このメンバーにしかできない学園祭を今年も企画した」と話す。

## 管弦楽団



12月の演奏会に向け、練習に励む毎日。11月には、メンバー自ら「売り込み」をして、宣伝を兼ねたアンサンブルコンサートを長崎市内で開く。日程が合えば老人ホームへの慰問も。インスペクターの山下はるかさん(21)は「(童謡)『ふるさと』を演奏したら、おじいちゃんたちが一緒に歌ってくれてうれしかったです」と話す。

## ロマンツアー合唱団



一大イベント、定期演奏会を12月に控える。11月は週3回の練習に加え、土日の自主練習など本番に向け練習が熱を帯びている。部員数は男女混合の30人。本番の雰囲気慣れるため、積極的にさまざまなステージに立つようになっているという。渉外部部長の中村彰太さん(20)は「声で感情を表したい」と理想を描く。

## 軽音楽部



依頼を受けて演奏に向かう。4月に老人ホームを訪問し、利用者から「また演奏してほしい」などの喜びの声が上がったそう。7月には恒例のチャリティーコンサートを聞き、売り上げを児童養護施設に寄付した。メンバーは43人。初心者が多いが、「先輩が後輩を指導して伝統を受け継いでいる」と話す。

# 学生の活躍

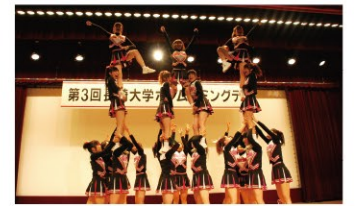
サークル活動に熱中!!  
課外活動にも熱い  
長大生を紹介

## よさこい部「突風」



札幌(6月)、佐世保(10月)であった祭りで奨励賞、準大賞をそれぞれ受賞。全国各地に赴き、迫力ある演技で観衆を魅了している。約120人のメンバーが、音響や衣装のデザイン、振り付けを役割分担している。結成10年目。部長の平川大勢さん(21)は「力強くどっしりした踊りで感動を与えていきたい」と伝統を守る。

## チアリーディング部



依頼を受けて試合やイベント会場へ。7月はV・ファーレン長崎の応援、8月には佐世保であった「アメリカンタウンフェスティバル」に出演した。会場を盛り上げるため、笑顔と、おなかから声を出すことを意識しているという。副部長の和田綾香さん(21)は「かわいいだけでなく迫力がある演技が目標」と話す。

## 編集後記

長崎大学の最近の大きな動きを特集して同窓生の皆様にお伝えすることを目的に「長崎大学ホームカミングデー・プレス」を編集・企画しております。今回は長崎大学の上半期の動きとして、「教育」「研究」「地域貢献」をトピックニュースとして取り上げ、ホームカミングデーに出演するサークル活動に熱中する学生の取り組みも紹介しております。卒業生と大学のネットワークを構築するためには、母校が社会に貢献していることが第一ですが、年に一度、母校で開催するホームカミングデーに参加して、卒業生の皆様学んだ青春時代の一コマを懐かしむ思いも大切かもしれません。

【編集・発行】 長崎大学広報戦略本部全学同窓会支援室 TEL.095-819-2154 FAX.095-819-2156

E-mail / kouhou@ml.nagasaki-u.ac.jp URL / http://www.nagasaki-u.ac.jp/

## グローバル 人材を育成

急速にグローバル化が進む現代。長崎大は国際社会でリーダーシップを発揮できる人材育成を目指して大胆な学士教育改革を行っている。

一つは外国語教育。学内に「言語教育研究センター」を設立。英語の教員を増やして学生の外国語学習のサポートや独自教材開発などに取り組む。自学自習システムを整備し、自宅でも二十四時間英語の勉強に取り組める。

もう一つは今秋から始まった「モジュール(科目群)方式」による授業。学生は二十四テーマあるモジュールの中から興味あるテーマを選び、一年半をかけてさまざまな角度からそのテーマについて深く学ん

# 時代に応じた 知発信

でいく。教養教育段階から、複数の教員がチームを組んで学生に複眼的なものの見方や考え方を提供する。この課程で学生は自主的に学び、考え、主張することが身につくようになる。こうした積み重ねが、社会に出た時に大きな糧になると考えている。

## 教育

国際社会でリーダーシップを発揮できる人材育成へ。モジュール方式の教育システムの導入や英語教育の強化など、教養教育改革に本格的に取り組む



大きな変化は専門教育の分野でもある。経済学部は文部科学省の新たな予算を獲得。二〇一四年度に国際的に活躍する人材育成を目指すコースを新設する。講義や卒業論文の執筆を英語で行うほか、長期留学などをカリキュラムに盛り込み「世界に通用する若者を育てる」(片峰茂学長)。来年度には、一部のカリキュラムを前倒しで取り入れる。

こうした新たな取り組みで、世界を舞台に活躍する卒業生が大きく増えることになりそうだ。

## 世界的にも 注目を集める

長崎大の八学部・六研究科では、さまざまな研究が行われ、その成果は高い評価を得

「長崎に根づく伝統的文化を継承しつつ、豊かな心を育み、地球の平和を支える科学を創造することによって、社会の調和的発展に貢献する」。長崎大学は、この理念に基づき、さまざまな活動を実施している。二〇一二年の本学の取り組みの一端を紹介する。

ている。

今年四月、医歯薬学総合研究科の荻朋男准教授らのチームが、カネボウ化粧品(東京)と共同で、日焼けの原因となる遺伝子を突き止めた。

紫外線は皮膚にとって最大の環境要因。紫外線に傷つけられた細胞内のDNAは、自ら修復して老化やがん化を防ぐ。この修復力の異常が日焼けの反応を示すことは、約三十年前に報告されていたが、原因となる遺伝子は未解明のままだった。今回の発見は「日焼けしにくい肌」に導く技術の確立につながる」という。米国の有力学術誌「ネイチャー・ジェネティクス」に論文が掲載されるほど、世界的にも注目度が高い。

研究フィールドは国内にとどまらない。長崎大は熱帯感染症を研究している熱帯医学研究所(熱研)を中心にケニ

## 地域と



待望のキャンパス内音楽ホール「長崎創楽堂」。ホール名称には、長崎発の芸術と芸術家の創造拠点にとの思いがこもる

## 地域に 開かれた大学

教育、研究だけでなく、地域との協力、貢献にも力が入る。今年四月、文教キャンパス内に設置した核兵器廃絶研究センター。核兵器廃絶は今や被爆地長崎だけでなく世界共通の目標であり、この問題に特化した公的な教育研究拠点は、国内外の注目を集めている。センターの役割の一つは、国内外の最新の核兵器情報を蓄積したデータベースの構築。

例えば、核兵器開発の国別・時系列年表や核軍縮に関する決議などを整理しインターネット上で発信する。シンクタンクとして、調査・研究を通じた政策提言や核兵器問題を多角的に学ぶ教養教育にも取り組んでいる。被爆地にある大学ならではの展開で、核なき世界の実現に向け、長崎県や長崎市とも連携してメッセージを発信していく。

「地域とともに」を目指す長崎大の歩みはほかにもある。四月、文教キャンパス内に完成した音楽ホール「長崎創楽堂」では定期的に無料でコンサートを開くだけでなく、市民にも安価な費用で開放している。

ホールの目玉は、十八銀行から寄贈された世界最高峰とされるスタインウェイ&サンズ社のドイツ製グランドピアノ。美しい音色が聴衆を癒やしてくる。世界の舞台で活躍するジャズピアニスト、小曾根真さんを迎えたこけら落としコンサートは、終了後感動の拍手に包まれた。大学の一施設ではなく、市民が音楽に触れる場として今後も大きな役割を果たしてくれそうだ。

## 研究



長崎大学の研究者がケニア共和国での医療支援活動を始めたのは1966年。現在では、ナイロビ本部のほか、2カ所の拠点を置く

ア共和国で四〇年以上にわたる医療協力を行ってきた。その活動は今、新たなステージに差しかかっている。

一つの軸は、従来通りの熱研を核とする取り組み。アフリカに蔓延する複数の感染症を一括同時診断できる技術の実用化などを目的とした取り組みが、国の「途上国におけるイノベーションを促進する国際協力の戦略的推進」事業に採択され、今年度から始まった。また、森田公一教授をプロジェクトリーダーとするグループが黄熱やリフトバレー熱などのアルボウイルス感染症のアウトブレイクを封じ込める迅速診断キットの開発などに乗り出している。

もう一つの軸は、感染症分野以外での貢献。今年八月には、工学部と水産学部が地元の関係者を対象に企画説明会を実施。日本で培ってきた研究成果をケニアに移し、現地の水質浄化プロジェクトや漁業資源管理に乗り出そうとしている。長崎大ならではの研究が世界をフィールドに展開されつつある。